

震災子ども支援室の立ち上げ 培った地域臨床のノウハウで支援

加藤道代教授は、生涯発達心理学を専門として、家族、職場、地域における様々な年代の人々の相互成長を視野にいた、発達相談、親や家族カウンセリング、支援者への専門的援助などの地域臨床実践を行っている。

東日本大震災後は、所属する教育学研究科が設立した「震災子ども支援室」室長として支援活動を開始した。ひとり親や里親になった方への支援も含めて、専任の臨床発達心理士等が、10年間の長期的な心理的支援にあたる。「とても難しい仕事で、話があった時は正直何をどうやったらいいかと悩みました。私がこれまでにやってきた援助論を総動員しなければと思っています。」

震災孤児・遺児については、全国の施設や里親の受け入れ要請をすすめていたが、結果的にはほとんどの子どもたちが親族引き取りとなっている。「通常の里親は社会的養護を目指して里親になるのですが、今回の震災では何の準備もなく里親になっています。親として育てていくという現実がこれから迫ってきます」。電話相談からは、1年間は頑張っていたが2年目から学校に足が向かなくなった子どもや、環境の変化に疲れて子どもとの関わりに自信がもてなくなっている親の姿もうかがえる。

現在支援室では、無料電話相談、訪問相談、里親対象のサロン、支援に携わる人たちへの支援、シンポジウム、研修会などを実施するほか、行政や関連団体との情報共有につとめている。宮城県、あしなが育英会・宮城県里親連合会などの関係機関との連携の中で、他ではできないことの「隙間を埋める」という細やかな方法論で支援を進めていきたいという。「地域資源という横軸と10年間という縦軸をいかに組み合わせるかだと思えます。未曾有の震災の後の10年。想像力を駆使しながら援助していきたいです。」



【写真1】2011年11月、「震災子ども支援室 開室記念シンポジウム—親をなくした子どもに対する支援の中長期的展望—」を開催。宮城県の現状、親族里親の問題、これからの支援室の方向性などが議論された。【写真2】大学院教育学研究科教育ネットワークセンター内に震災子ども支援室が設立されている。これから10年にわたる支援の拠点となる。【写真3】大切な人・ものをなくした子どもたちのこころのケアは、震災子ども支援室の大切な支援のひとつ。



【写真4】支援室周知のためのポスター、チラシ。これらの広報物には東松島市の小学生が支援室のために描いてくれたブドウの絵をマスコットとして使用している。【写真5】相談ダイヤルを記載した専用のカードを作成。自治体窓口、学校、関連機関を通じて配布している。



教育学研究科
総合教育科学専攻 教授

加藤 道代

KATO Michiyo

1956年生まれ。宮城県出身。東北大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。専門は生涯発達心理学、臨床心理学。臨床心理士。東北大学大学院教育学研究科助教授、准教授を経て2011年より現職。

■震災子ども支援室
<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~s-children/>



遅延型アレルギーを抑制する 新たな細胞「ドレス細胞」発見

なぜアレルギーが起こるか? 免疫細胞が過剰に異物(抗原)に反応することが原因だ。ナチュラルキラー(NK)細胞は、抗原提示をおこなう樹状細胞と相互作用して免疫応答を促進することが知られている。

小笠原康悦教授は、このNK細胞の働きを自在にコントロールできる細胞を発見した。

「細胞同士の分子の受け渡しの可能性を7年前に発見しました。NK細胞とがん細胞を混ぜて、培養したときに、癌細胞の表面にある分子をNK細胞が持つことを偶然発見したのです。」

その後、NK細胞と樹状細胞の相互作用に着目して研究をすすめた。NK細胞が樹状細胞からMHCクラスIIという分子を引き抜き、新たな細胞に変化することを発見した。

まるでドレスを着替えたような動きから「ドレス細胞」と名付けられた。MHCクラスII分子を獲得したドレス細胞(MHC II dressed- NK cell)は、免疫応答を抑制し、遅延型アレルギーを抑えることが明らかとなった。

「NK細胞は、従来免疫反応を増強させる細胞と考えられていましたが、ドレス細胞に変化することにより、免疫反応を抑制する働きを持つわけです。ドレスを着脱させることにより、免疫反応を正と負に調節可能だということです。」後天的に細胞を自在にコントロールする方法が見つかれば、遅延型アレルギーの新たな治療法となりうると期待される。

「本発見は医学分野のみならず、サイエンティフィックにも極めて興味深いものです。これまで遺伝子発現制御により厳格にその発現が調節されていた分子が、後天的に細胞同士の接触により変化するという発見は、今後の生物学研究においても重要な礎になると考えられます。」



加齢医学研究所
生体防御学分野 教授

小笠原 康悦

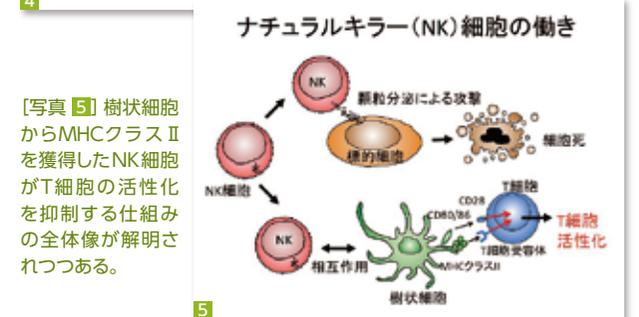
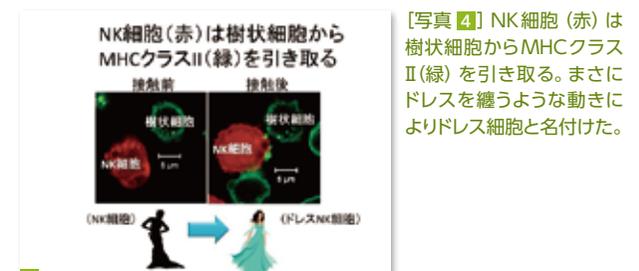
OGASAWARA Kouetsu

1967年秋田県出身。東北大学大学院歯学研究科修了。歯学博士。専門は免疫学。文部科学大臣表彰若手科学者賞など受賞多数。東京大学医学部助教、国立国際医療センター研究所室長を経て2008年より現職。

<http://www.med.tohoku.ac.jp/org/cooperate/115/>



【写真1】小笠原教授の研究室。新たに発見したドレス細胞をもとにT細胞が関与する疾患の新たな治療法の開発研究を進めている。【写真2】接触性皮膚炎(金属アレルギー、かぶれ、薬物過敏症など)に代表される遅延型アレルギーを抑制する新たな細胞の発見。実際の細胞が接触する受け渡しの現場をとらえる写真。



【写真3】樹状細胞からMHCクラスIIを獲得したNK細胞がT細胞の活性化を抑制する仕組みの全体像が解明されつつある。

